

# 丹波篠山市西紀北・中地区における ファンランイベントの実施成果と今後の展望（地域貢献活動推進事業）

\*本研究の一部は、丹波県民局、丹波篠山市「令和7年度 学生等による地域貢献活動推進事業」の助成を受けて実施しました。

神戸学院大学 現代社会学部  
菊川ゼミ 新川裕士・笹谷樹里奈・山中悠生

## はじめに

本発表では、ファンランイベントの開催を通じた実施成果と今後の展望を整理した。2025年10月5日、参加者が走りながら様々なアクティビティを行うファンランイベント「第4回山賊ワイルドラン&炎の宴 in 丹波篠山」を西紀北・中地区で開催した。本イベントは、NPO法人リベルタ学舎（神戸市）、丹波篠山キャンプ場やまもりサーキット（丹波篠山市遠方）と株式会社ミドリカフェ（同市倉本）からなる山賊実行委員会共同企業体と神戸学院大学現代社会学部菊川ゼミが企画・運営している。西紀北・中地区内に点在する魅力を繋げ、地域資源・課題を市内外の方に向けて発信することを目的とした。その上で、交流・関係人口の創出を目指した結果、過去最多となる70名が出走した。今年度は、ラン大会以外での地域との関わりを創出するため、自治会等への地域調整（ご挨拶）に重きを置き、より地域に根ざしたイベントを目指して活動した。加えて、大会終了後、自治会等と次年度に向けた調整を行い、今後の展望を考察した。



2025年度  
菊川ゼミ



第4回  
山賊ワイルドラン  
参加者

図1. 第4回大会 集合写真

## 第4回大会について

### 1)大会の概要

2025年10月5日、ラン大会と炎の宴を西紀北・中地区で実施した。昨大会と同様に、参加者の交通の便を考慮し、スタート・ゴール地点を丹波篠山キャンプ場やまもりサーキットとし、黒豆の館で折り返す全長約26kmのコース（図2）とした。チェックポイントとしてアクティビティを計11か所設けた。

### 2)炎の宴 - 会場：丹波篠山キャンプ場やまもりサーキット

菊川ゼミとしてかわりのある兵庫漁業協同組合（神戸市兵庫区）と連携した、しらす丼の販売やまき割り大会、竹資源を活用した子ども向けアクティビティを用意した。ここでは大会関係者と地域住民、大会参加者との交流機会の創出を目的とした。

### 3)ラン大会

前大会に引き続き、丹波篠山市立西紀北小学校と連携し、今年度はバンダナの作成や丹波篠山の特産品の書かれた地図を制作し、児童とともに地域資源の探究を行った。また、里地里山での間伐・農作物（サツマイモ）の収穫・まき割り体験やローカルクイズ、「ささやまサイダー」を飲む等のアクティビティをチェックポイントに設けた。

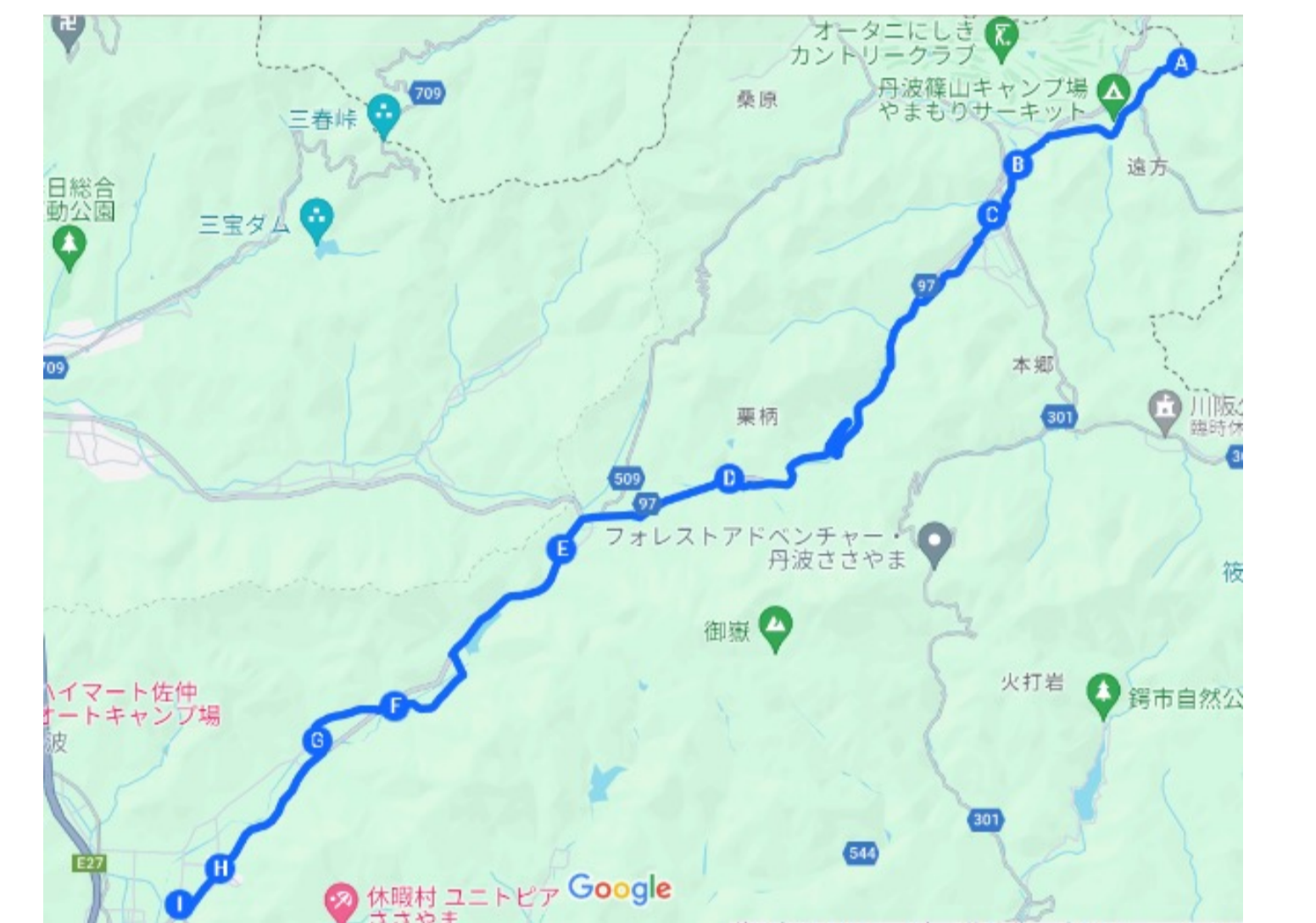


図2. 第4回大会のランコース



図3. 第4回大会での炎の宴とラン大会の様子

## 大会参加者の声

今大会には、総勢70名となる18チームが参加した（前年比+25名）。大会後、アンケート調査によって寄せられた参加者の声には、以下のような意見が示された（対象者数：70人、有効回答数：9件、回答率：13%）。

まず「良かった点」については、「普段できないまき割りや間伐体験ができた」ことや、「参加者同士の交流がとても楽しかった」といった声が寄せられた。ならびに「RPGランという他にはない課題達成型ラン」であったことや、アクティビティやフェイスペイントなどの非日常体験要素から、「山賊らしさ」を感じられたところが評価された。一方で、「改善してほしい点」では、「コースがわかりづらい」との意見が多く、ほかには「復路にトイレがない」「アクティビティが混み合う」といった声が寄せられた。

また、参加目的については「アクティビティへの興味」が最も多く、次いで「地域住民との交流」が多く見受けられた。さらに、今年度は「知人からの紹介」による参加者が多く、本大会を媒介して参加者同士の交流が盛んであったことがうかがえた。

## まとめ・今後の展望

アンケート調査を踏まえ、今年度の課題を整理した。運営側の課題としては、自治会等への地域調整を実施できた一方で、地域住民と継続的な関係構築には至っていない点が挙げられる。また、参加者側の課題としては「地域住民との交流」を望む声があるにも関わらず、その機会を十分に提供できなかったという点が挙げられる。これらの対策として、前者は、地域住民との関わりを深化させる必要があるといえる。具体的には、平時に地域住民と協働して竹林整備等を実施することで、地域の課題解決に寄与しながら、双方向的な関係構築を目指したい。後者は、通年で地域住民と関わる事ができる仕組みを構築することで、交流の機会を確保する必要がある。

今大会は、農林水産省公式YouTube（BUZZMAFF ばずまふ）に取り上げられたことにより、大会の認知向上にとどまらず、当該地域の魅力や課題を地域内外の人びとに広く発信する機会となった。しかしながら、依然として大会の認知度は高くないことから自治会との連携を通じて、回覧板等の地域ネットワークを活用した広報を実施し、認知向上に努めたいと考える。

次大会では、地域住民や地元事業者とさらなる関係の深化を目指した企画・運営を行うことを展望とし、地域住民と連携・共創を図ることで、大会の質と意義を高めたい。



図4. 第4回大会における課題と対策